

「能楽」をテーマとした体験型日本文化学習のコースデザインと授業実践

著者	深川 美帆
著者別表示	Fukagawa Miho
雑誌名	第5回スペイン日本語教師会シンポジウム発表論文集
号	2019
ページ	35-36
発行年	2019
URL	http://doi.org/10.24517/00057319

「能楽」をテーマとした体験型日本文化学習のコースデザインと授業実践

深川 美帆
金沢大学国際機構
mihofk@staff.kanazawa-u.ac.jp

【キーワード】 日本文化、伝統芸能、能楽、体験型授業

1 はじめに

日本の大学で日本語を学ぶ半年または1年の短期交換留学生を対象に、留学先の地域に根づく伝統文化の一つである「能楽」（能と狂言）をテーマとして体験を通して日本文化を学ぶコースをデザインした。本稿ではその教育実践について報告する。

近年、海外での日本文化に対する興味・関心の高まりもあり、日本文化について学びたいという動機を持って留学する学習者が増えている。しかしながら、日本の伝統文化について理解しようとする時、ともすれば、単に「観た」「体験してみた」という表層的なレベルに留まって終わってしまうことがある。また一方で、深く学ぼうとすると、言語の壁や文化リソースへのアクセスが難しい場合も少なくない。筆者は、こうした困難点を克服しつつ、大学教育としての質を備えた、より深い日本文化への理解を可能にするコースデザインが必要であると考えた。そこで、「能楽」をテーマに日本文化への深い理解と学びを目指した日本文化体験学習のコース「日本の伝統芸能」をデザインするに至った。

2 「日本の伝統芸能」コースの概要

本コースは、金沢大学国際機構「日本文化・社会学習プログラム」¹の1コースで、「能楽」を主題として、毎回これに関連したテーマで日本の伝統芸能と音楽を体験と講義を通じて学ぶものである。「能楽」をテーマにしたのは大学が所在する地域においてかねてより「能楽」が盛んであり、地域の文化や歴史を通して日本を理解できるリソースとして好適であると考えたからである。毎年春学期（4～8月）開講で、全9回から成る（表1）。コースでは毎回、学内外の能楽研究者や地域で活躍している能楽師や狂言師、演奏家を

回	テーマ	主な内容	場所
1	ガイダンス	コースについての説明	学内 講義室
2	和太鼓	世界の太鼓の発表、和太鼓演奏体験	浅野太鼓 体験学習館
3	篠笛	笛の講義、篠笛演奏の鑑賞と体験	学内施設 角間の里
4	三味線	三味線の講義、演奏の鑑賞と体験	学内施設 角間の里
5	能楽美術館見学	能楽の講義、展示（能装束等）鑑賞	金沢能楽美術館
6	狂言	狂言についての講義と体験	石川県立能楽堂
7	能楽	能楽についての講義と体験	講師宅
8	能楽（講義）	鑑賞する能の演目についての講義	学内 講義室
9	能楽鑑賞	能楽の舞台「観能の夕べ」鑑賞	石川県立能楽堂

表1 「日本の伝統芸能」コース概要

講師に迎え、そのエッセンスを体験する授業を行う。受講者は初級レベル修了以上の日本語を習得した留学生が主な対象者だが、日本人学生も履修している。授業は講師により日本語で行われるが、必要に応じてコーディネーター（筆者）が内容理解に関わる語彙や説明、媒介語（英語）による資料を取り入れるなどして協働で行う。履修定員は毎年18-20名（留学生15名、日本人3名）で、これまで（2012～2018年）の受講者数は計133名（日本人43名、留学生90名）、国籍は28ヶ国・地域である。

3 コースでの学び

このコースが目指す、伝統文化に対する深い理解や学びがどのくらい実現できているかを、1) 学習者の満足度のいくものとなっているか、2) 授業を通してどのような学びがあったかという観点から、2012～2018年度までのコースの毎回の授業の小レポート、学期末レポート、および授業観察を通して分析・考察した。まず、1) 満足度については、毎回の授業後に満足度を5段階で回答してもらった結果、留学生が4.5、日本人が4.6、全平均で4.6と、高い満足度であることがわかった。その理由としては、知識として持っていた日本文化を実際に体験できたことを多く挙げていた。次に、2) 授業を通してどのような学びがあったかを、毎回の小レポートおよび期末レポートを分析した結果、学習者らは、楽器の音色や舞台の雰囲気など、まさに五感を使って日本文化を理解しようとしている様子、そして毎回の講師との接触を通じて日本人や日本を理解している様子が窺われた。

(1) “*I believe that such in depth cultural experience should be offered to more foreign students. It gets us closer to many facets of the Japanese cultural heritage and thus, to the Japanese spirit. Every sense we met was welcoming, humble, passionate and generous.*” (2018年度学習者レポート)

また、日本の美意識・思想に対する独自の考察や、伝統文化の継承と現代社会の問題など、伝統文化から現代社会に対しても考察を広げていく様子が観察された。

(2) “*I feel that Japanese culture is always looking to search in simple things a way to convey beauty. (...) By experimenting in this class, I think I grasped a little bit better the minimalism aspects in Japanese culture.*” (2017年度学習者レポート)

4 今後の課題

今後、より学習者の満足度を高め、深い学びを実現するためのさらなる工夫としては、まず、授業での言語情報提示の工夫が挙げられる。学習者が理解できる日本語や媒介語による説明の充実を目指す。また、講師とのインタラクションを多く取り入れた講義、グループワークを織り込んだ学習活動を組み込むことも理解の深まりに作用すると考えている。

謝辞

本コースの実施に際して多大なるご協力をいただいた、羽柴尚典先生（篠笛）、鶴町佳子先生（三味線）、山内麻衣子氏（金沢能楽美術館）、能村祐丞先生（狂言体験）、藪俊彦先生（能体験）、西村聡先生（能講義）に、心より感謝申し上げます。

注.

¹ プログラムの詳細は金沢大学国際機構 <http://kuglobal.w3.kanazawa-u.ac.jp/sie/culture/> を参照のこと。